

大塚和との邂逅 (7) 大塚和企画作品レビュー (3)

「日本列島」(1964年 日活) 監督 熊井啓 原作 吉原公一郎 脚本 熊井啓 撮影 姫田真佐久 音楽 伊福部昭 美術 千葉和彦 助監 三浦朗 出演 宇野重吉 二谷英明 芦川いづみ 鈴木瑞穂 大滝秀治 佐野浅夫

妻を米兵に殺害された米軍基地通訳秋山(宇野重吉)は、米軍曹長怪死事件の調査を依頼され、警部補(鈴木瑞穂)、新聞記者(二谷英明)の協力を得て、手掛かりの人物を日本の北から南まで訪ね歩きます。その間、偽札事件、スチュワーズ殺人事件、外国人神父国外逃亡事件といった不可解な事件が、元の米軍曹長怪死事件と何らかの関連性を持ちながら発生します。この作品は、帝銀事件、三鷹事件、松川事件、下山事件、スチュワーズ殺人事件など敗戦後米軍占領下で実際に起きた怪事件を軸に黒い霧の正体に迫っていきます。米軍占領下の日本人を追体験するものであり、ドキュメンタリー性にミステリーの要素を加えた実に大きなスケールの作品に仕上がっているのです。

この作品を見て率直に驚いたのは、ストーリーはフィクションですが、その中に極力調べられた限りの事実が織り込まれていることであり、アメリカの謀略を追求するノンフィクション文学が現れる始めていたとはいえ、まだ後年のようなCIAの活動の本格的暴露が行われる以前であり、当時の作品としては極めて野心的であったということなのです。緊迫感をもったストーリーの展開は、現在見られる同種の作品と比して何ら遜色はなく、むしろリアリズムを基調とした奥の深い怖い作品です。

日本映画界で社会派監督と言えば、山本薩夫、今井正が挙げられます。また、ある意味で山田洋次という人もこの範疇にあると考えられます。こうした監督たちに共通するのは、左翼的思想を持ちながらも良質なエンタテインメント性を持った作品を作ることのできる能力があり、観客を呼べる映画監督として国内メジャーの映画会社から制作依頼が持ち込まれました。それに比して、熊井啓は生硬過ぎる一面を持ち、硬派な社会派監督として活動を続けます。デヴュウ作「帝銀事件 死刑囚」(1964)は、占領下で起きた謀略事件として帝銀事件を扱いデヴュウ作とは思えない力量を発揮し見応えのある作品に仕上がっています。(この作品は大塚和企画作品ではありませんが)GHQによる占領下の時代を筆者は経験してはいませんが、先の大戦で深い傷跡を物理的にも精神的にも負ったまま、日本と日本人は世界的な冷戦構造の中で、都合よく操られ忸怩たる思いの中で憔悴せざるを得なかったのです。ここで、熊井啓は「日本人とは何か」をテーマにするようになり、従前から「日本人とは何か」を考えていた大塚和との接近を可能にしたのではないかと想像するのです。大塚和は、1985年に「海と毒薬」についての「企画意図」を書いています。その中で「映画界が衰退を続ける今こそ、『日本人とは何か』という主題を追い詰め、描き続けるより他に道はない」と記します。そして、「海と毒薬」が、「『日本人とは何か』を最も明快に表現している小説」と考え「日本人にとっての『罪と罰』とは何を意味するものであろうか」と結びます。大塚和の企画(製作)した130本の作品の根底あったのは、このことではないかと考えるのです。

熊井啓は76年の生涯の中で19本の作品を遺しました。(1964年~2002年の活動期間)大塚和との関わりは「日本列島」「血の群れ」(1970)「海と毒薬」の3本です。本数こそ少ないものの、二人の間で構想された作品は多数あったものの実現しなかったのが現実です。(「立てた企画は20本を超えていた」とは熊井啓の弁)熊井啓の作品の系譜を大塚和と考え合わせれば、「帝銀事件 死刑囚」「日本列島」「地の群れ」と熊井啓の思想と観念が収斂され、「海と毒薬」という到達点に至ったように考えられるのです。二人の間の企画作品は、それでも、「忍ぶ川」(1972)は東宝・俳優座提携作品として、「おお牧場は緑!」は同じ提携で「朝やけの詩」(1973)、「かさぶた式部考」は西友映画事業部で「式部物語」(1990)として発表されます。そして、「海と毒薬」は企画から16年を経て、1986年に公開され大塚和最後のプロデュース作品になりました。ついでに言いますと、熊井啓のこの「海と毒薬」を始め、「千利休 本覚坊遺文」(1989)「式部物語」「深い川」(1995)の助監督についたのは、「行き行きて進軍」(1987)「全身小説家」(1994)「水俣曼荼羅」(2021)といった優れたドキュメンタリー作品を監督した原一男でした。また、「式部物語」の原作である秋元松代脚本の「かさぶた式部考」を初めて映像化したのはRKB毎日放送で、1965年に制作された時のタイトルは「海より深き・か

さぶた式部考」でした。（演出は久野浩平）熊井啓は、1930年に長野県で生まれ大学も信州大学と長野での生活が長いのですが、学生時代偶々ロケで長野に来ていた関川秀雄監督の手伝いをしたことから、大学卒業後は1954年に日活撮影所助監督部に入社する前に、独立プロの助監督経験があります。関川秀雄という当時軍国主義の糾弾と反戦思想を色濃く表現した監督の影響を受けたものと考えられます。（関川秀雄という映画監督についても日本映画界の中で忘れてはならない名匠の一人と筆者は考えます）

熊井啓は2007年に76歳で亡くなりますが、遺作となったのは古巣日活で配給された、黒澤明が脚本だけを遺し制作できなかった「海は見ていた」(2002) でした。